

ラオスの こども通信

81号
2021年12月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 絵本『ぼくはどこへいくの』、子どもたちのところへ ▶p.1
- はじめる・つながる・つくりだす ▶p.2
- 「ラオスのこども」の仲間たち ▶p.4
- メコンのほとり「恋」 ▶p.4



*写真の説明はp.4をご覧ください。

絵本『ぼくはどこへいくの』、子どもたちのところへ

バナナちゃんとビニール袋くん。仲よくなって村をめぐるます。人びとのくらしのあちこちにバナナが使われています。そして、やがて土に還るバナナちゃん。ビニール袋くんは行き場がありません。(絵本『ぼくはどこへいくの』)

今、ラオスでもプラスチックごみが大きな社会課題となる中、当会では増刷を計画しています。



祭壇の飾りつけにバナナの葉が使われる

豊かな自然、人びとのくらし、環境へのメッセージ

紙芝居・絵本作家のやべみつのりさんと当会がつくった『ぼくはどこへいくの』。環境の大切さを子どもたちに伝えたいと、ラオスを訪れた「環境の絵本を送る会」の方の思いを受けて2004年に出版されました。

ほのぼののたのしい中に環境へのメッセージが込められた絵本で、その味わいは、やべさんならでは。私たちがこだわったのは、豊かな自然のもとで育まれたラオスの人びとのくらしを描くこと。そして、増えてきたビニール袋を見つめてほしいということでした。

ビニール袋くんは、バナナちゃんに「どこから来たの?」と聞かれ、石油採掘場のことを話します。ヤギが食べものと間違えてビ

ニール袋を食べたら死んでしまった、という場面は、ラオスの先生のアドバイスで、子どもたちによく伝わるだろうと入れました。便利なビニール袋を、環境への影響を知って取り扱ってほしいと願う作品です。やべさんと会は、ラオスとともに活動しながら、議論を重ね、数年がかりで、この絵本を完成させました。

ともに楽しむことの原点、そこから始まった

やべさんが初めてラオスを訪れたのは1995年。子どもたちと、空き缶のコマ、ペットボトルの笛などのおもちゃづくり、野焼きと呼ばれる陶芸(人形など)、そして謄写版を使った紙芝居づくりをしました。

このときのことを、やべさんは、ラオスの飛行場に到着してタラップを降りた瞬間に、なぜか自分の子どものころの風を感じた。みんなでつくった紙芝居を演じたときの盛り上がりは、ともに楽しむという紙芝

居の原点がここにあると思った。自分の生きてきた時間の巻き戻しフィルムを見ているようだったと振り返っています。さらに、研修や作品づくり、演じ方などのコンクールなどを通し、口承文化の豊かな土壌にふれながら紙芝居を広げてきました。



紙芝居づくりセミナーでのやべさん(左)。1996年

こうした中から生まれたのが、環境絵本『ぼくはどこへいくの』です。ラオス各地の学校図書室に配付され、子どもたちの手に届き、さらに、地域開発支援などを行う国際協力NGOが、環境教育の親しみやすいツールとしても活用しています。

バナナゲームで、くらしの中のバナナ再発見

『ぼくはどこへいくの?』は、「バナナゲーム」としても子どもたちに親しまれています。絵本の中でも、バナナは食べるだけでなく、くらしのあちこちに登場することが描かれています。

そこで、読んだあと、みんなでバナナ全体の絵を描き、葉、花(日本ではなじみがないですが)、茎など、それぞれの活用方法を出し合いっこします。

葉は食べ物を包んだり、花は料理に入れたり、茎は豚の飼料に使ったりと、実にさまざまです。

「ちょっと待って! まだあるから!」

「これ、まだ出てないよね!」



付箋でいっぱい。バナナの絵



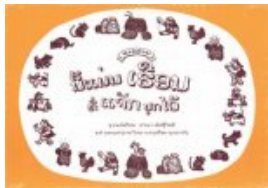
グループに分かれて、バナナの使いみちを、ありったけ書き出していく

どのグループが一番たくさん出せるか競争になってたいへん盛り上がります。答えが出るたびに沸き起こる歓声、用途が書かれた付箋でどんどん埋めつくされていくバナナの絵…。

最後にスタッフから、出なかった使い方、例えば、紙の原料、産後の風習で体を温める燃料などのお話をして、おしまい。こうやって楽しみながら子どもたちは、ラオスの自然の豊かさ、そのなかで生きるくらしの知恵を学んでいきます。

やべみつのりさんの みんなでたのしむ絵本と紙芝居。 まだ届けられていない学校にも! クラウドファンディングします!

『ぼくはどこへいくの』、そして同じくやべさん作の紙芝居、みんなでリレー式に演じる、ラオスで人気の『これはジャックのたてたいえ』。学校図書室に届けたい! ご協力ください!



くわしくは、こちらへ



『ぼくはどこへいくの』(左)、『これはジャックのたてたいえ』

はじめる・つながる・つくりだす [2021.6-2021.11]

先生と生徒で、もっと活かそう学校図書館

学校図書館開設後の研修の第2ステップとして、授業への活用など本を活かすための「応用研修」を2020年12月にヴィエンチャン県ボンサイ中等学校で実施しました。授業に取り入れてみてどうだったか。感想を聞きました。

先生たちは、「教科書にはない図などを使って、視覚的に教えることができた」「いつもより生徒が理解できていたようだ」「全クラスでやるべき! 成績もアップするはず」と、手ごたえを感じている様子です。また、「(グループワークや調べ学習で) 生徒が活動に集中するようになり、お互いに情報を交換したり、助け合ったりすることができた」と、主体的な学びの効果があることも分かりました。

生徒たちからも、「教科書だけの授業より分かりやすかった」「面白かった」「もっと自分で調べてみたくなった」と、頼もしい声が挙がっています。

今もなお人数分の教科書が揃わないままに授業が行われている学校がほとんどで、その教科書には写真や図解があまり載っていません。図書館の本が強力な助っ人になってくれるのです。



中学6年「生物」、身体のしくみの授業で活用できる本の展示

図書館担当教員と図書ボランティアの生徒たちは、図書館サイン(表示)・展示についても応用研修で学びました。どこにどんなサインを置けば探している本が見つかりやすいか。先生や生徒に興味を持って図書館の本を手にとってもらうには、どんな展示コーナーを作って惹きつけるか、グループで考え、実践しました。

「本棚のサインを工夫して、本が探しやすくなった」「新しく来た人にはお薦め本の紹介展示があると分かりやすい思う」など、自分たちでよりよい図書館を作っていくことができるんだ、という思いにスイッチが入ったようです。

<冬募金>

「応用研修」で魅力ある図書館を増やしたい!

先生たちが図書や図書館を授業で活用するスキルを身につけ、生徒も活躍して、みんなが入りたくなる図書室に。

ボンサイ中等学校で取り組んだ「応用研修」を、さらに他の中等学校図書室でも提供できるように、ご支援ください!

くわしくは、こちらへ



ラオスでコロナが急激に拡大

4月から帰国労働者を中心に感染者が増え、ロックダウンが続いていたラオスは、9月になり事態がさらに悪化。都内縫製工場の集団感染などを皮切りに、瞬く間に市中感染が拡がり、未だ収束の兆しがみえません。11月に入り、1日の新規感染者が1,000人を超える日も。死者の数も増え続ける一方です。

学校は再閉鎖、県境も封鎖されているため、ラオス事務所のスタッフ達は、学校へ研修やモニタリングに行くことができません。オンラインが発達したとはいえ、会の活動は実際に現地を訪れ、生徒や先生、村人たちとの肌と肌のふれあいがあってこそ。この状況が長引くと、活動が満足にできないばかりか、会の運営にも支障をきたす事態になるため、頭を抱えています。



コロナ感染者まとめ
2021年11月10日

左: 新規感染者
+1,140人
(以下各県内訳)

右: 上から
累計感染者数
50,031人
新規死亡者数
2人
累計死亡者数
91人

日々、SNSでアップデートされる感染者情報。ニュースレター80号の時の数値(5/23)と比べて下さい。

学校図書館とつないでオンライン授業!

2020年に続き、学習院女子大学国際コミュニケーション学科のオンライン授業で、ラオス事務所、そして支援しているヴィエンチャン県3校の学校図書館とライブ中継しました。

ボンサイ、サカ、ヒンフープ各中等学校の図書館担当の先生が、スマートフォン片手に自分たちの図書館を披露し、図書館ボランティアの生徒からは、同大学の支援で再版された『カンパーとピーノイ』『カンパーとナンガー』のお気に入りの場面、見どころを教えてくださいました。大学生からは、読み聞かせのコツについてスタッフに質問があったり、離れた場所にいながらライブで交流ができ、お互い良い刺激になったようです。



先生・生徒にとって日本の学生と話すのは初めて

たくさんの絵本が届きました!

ラオスの子どもたちが、たくさんの本に出会い、世界を広げられるように、日本語の絵本にラオス語の翻訳を貼って届ける「ラオス語絵本プロジェクト」を1998年から続けています。コロナ禍にあって在宅でできる国際協力として、多くの方に協力いただき、2020年4月から累計で145人が参加、絵本1,267冊が作成されました。心からお礼申し上げます。



コロナで一時中断していた船便が再開され、東京事務所からラオス事務所に無事到着しました。私たちが支援している各地の学校図書室に届け、当会事務所併設の図書室でも活用します。子どもたちは絵がきれいな日本や海外の絵本も大好きです。

当会では、「ラオス語絵本プロジェクト」への参加を広く呼びかけています。個人やグループでの参加、講演とセットにして学校や企業でも実施できますので、お問い合わせください。

くわしくは、こちらへ



人気No.1の民話絵本、増刷しました!



カンパーとピーノイ(孤児と小さいお化け)』2,000部(左)
『カンパーとナンガー(孤児と象牙娘)』1,500部
文: ドゥアンドゥアン プンニャヴォン 絵: ヴォンサヴァン ダムロンスク
ご支援: 学習院女子大学

ラオスで最も有名な民話のひとつ。大人気のこの本は、どこの図書室でも貸し出しNo.1で、たくさん読まれるために直ぐにボロボロになってしまいます。新しい本を図書室に届けるため、またこの本を買って読みたいという子どもたちのために増刷しました。

2作品の物語は繋がっていて、第1部では、貧しいが心優しいカンパー(孤児)が、不思議なお化けたちの助けで金持ちになり、美しいナンガーと結婚するまでのお話。第2部は、ナンガーの評判を聞いた王様が、ナンガーを自分のものしようとカンパーに無理難題をしかけてきますが、お化けや動物の知恵と魔法に助けられ、無事にナンガーと幸せに暮らします。

「ラオスのこども」の仲間たち

圧巻、想像を超える小さなアーティストたちの作品

相馬淳子さん／PaTu代表



2022年「ラオスのこども」カレンダーは、表から裏表紙まで小さなアーティストたちの作品です。これらは、私がラオス滞在時(2016-2019)にホアンカオ幼稚園小学校で行った実験創作活動での子どもたちの作品の一部です。

夫の仕事でアフリカ・アジアに十数年生活する中で、各国の織物に惹かれていきました。いつか織物文化を学びたいという願いが叶い、2016年、様々な状況に導かれ織物文化を学べるラオス移住が始まりました。

一方、元中学校の理科教員で子どもの絵画教室でのアシスタントだったことなどがあり、ラオスの子どもたちと何か活動したいとも考えていました。その年からの「ラオスのこども」での活動が貴団体との関わりの始まりです。現在はPaTu(ラオス語で「扉」)を立ち上げ、ラオスの織物・文化紹介などをイベント形式で細々活動しています。

「ラオスのこども」では主に中学生対象で、空気砲、ペーパークロマトグラフィーなど実験がメインの活動。スタッフが熱心に活動に取り組む姿が印象的でした。

その後、依頼があり、活動の拠点をホアンカオ幼稚園・小学校に移し、先生方の多大なる協力のもと、通算108回の活動を行いました。想像を超える子どもの能力に驚くことが多く、活動は刺激的でした。なかでも等身大絵画(p1の写真)は、思い出に残る活動です。2年目には1年前の作品を並べて身体の大きさだけではない子どもたちの成長をみることであったのは私自身、継続した活動での貴重な経験となりました。

どこに暮らしていても、人との繋がりを感じ、平穏で過ごせることを願い、微力ながら活動を続けていきたいと思います。

表紙の写真

等身大絵画／小さな絵を描くことが多かったため、思いっきり描こう！と床に寝転び、クレヨンで自分を型取りました。線だけで描かれた自分、友だち、先生の形にしばらく大笑い。その後、各自が等身大の自分に「大好き」と「夢」を描いていきました。教室は静まり返り、制作に集中している姿がありました。集中できなくなった子が周りの姿を見て泣き出す一幕も思い出されます。学校での展示は圧巻で、子どもたちが満足そうに眺めていました。(相馬さん)

特定非営利活動法人ラオスのこども

組織の理念「ラオスのこども」は、公正で平和な社会づくりに貢献することを目的として、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しながら、読書に親しむ環境をつくります。

ラオスのこども通信 81号

2021年12月発行 代表：チャンタソン・インタヴォン 編集人：森透
発行：Action with Lao Children / Deknolao
(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども
〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303
TEL/FAX 03-3755-1603 e-mail: alctk@deknolao.net
<http://deknolao.net> 郵便振替 00140-6-462494
都営地下鉄浅草線西馬込駅南口下車徒歩7分



ラオスのこども カレンダー2022

子どもたちの作品がいっぱい！



ご注文は
こちらまで！



2021年通常総会、今年もオンラインで実施

ラオスのこども通常総会を9月18日、ライブコミュニティ西馬込とオンラインとで開催しました。活動会員45人(書面表決、委任状提出を含む。うちオンライン参加は17人)と活動協力者7人の合計52人が出席しました。

2020年度の事業報告案・決算報告案、理事の承認・監事の選任に関する事項が承認され、2021年度の事業計画・予算が報告されました。第2部は、代表のチャンタソンが今のラオスの状況をヴィエンチャンから報告しました。

「ラオスのこども特別募金2021」報告とお礼

2021年6月から9月末まで、「ラオスのこども特別募金」を実施し、合計79件782,980円の寄付金をいただきました。困難な社会状況において、昨年に引き続いてのお願いとなりましたが、多くの皆様にご支援いただき、心より御礼申し上げます。これまでの成果を定着させ、ラオス社会が自律的に動く流れを作るためにまだ働きかけが必要です。これからもご支援と応援をどうぞよろしくお願いいたします。(事務局長 野口朝夫)



メコンのほとり恋

ラオスに恋して『恋するラオス』が完成！

ラオスへの愛が募った3人が、「恋するラオス編集倶楽部」というユニットを組み、各自の得意分野を生かして作ったのが、現地のいきいきとした写真が満載の『恋するラオス』です。

コロナ禍前から肅々と「仕事や家事・育児そっこのけで」(本文より)、足かけ2年で完成した本書は、「ラオスのこども」のピーマイ・パーティでのさまざまな「出会い」が発端です。チャンタソンさん、野口さん、ラオス料理、織物……。こうした出会いのお陰で、ガイドブックでも専門書でもない、唯一無二の「ラオス本」となりました。

前半は「2002年」と「2018年以降」という、時を隔ててラオスを旅した経験を踏まえ「体験してみたくなる」エッセイを10の

切り口で紹介。後半はチャンタソンさん監修のラオス料理のレシピを「作ってみたいくなる」写真とともに掲載しています。さらに、現地とつながりのある団体や日系企業の方に「ラオスへの思い」を語っていただいているのも本書ならではの(もちろん「ラオスのこども」の紹介ページもあります！)。

まだまだコロナ禍は落ち着きませんが、本書のページをめくりつつ、彼の地に思いを馳せていただければと思います。

(江頭紀子さん／ボランティア)

ご購入はこちらから <https://www.laos-club.com>